

2024年『書林揚解』現代語訳（暫定版）

およソ 著<sup>a</sup> 著  
あらはシ 書立  
ヨツルハ 論、

ズもとツク 必本 二於不レ得レ已而有レ言。

一般的に、本を書き、論を展開するには、必ず言わざるをえない（自説）が根本にある（べきだ）。

しかルニノ 而後其言当、其言信、其言有レ用。

そうやってはじめて、その言葉は妥当であり、その言葉は誠実であり、その言葉は用いる価値がある。

ゆゑニ 故君子之言、達ニ事理一而止、

なサ 不レ為<sup>三</sup>敷衍流宕、放言高論、<sup>b</sup>取ニ快一時一。

そういうわけで、君子の言葉は物事の真理にまで到達してやめており、節度なく述べ立てたり、無責任に言い放ったり、好き放題に分を超えた議論をしたりして、一時的に快樂を得ることをなどしない。

けだシ 蓋非 要則可レ厭、不レ確 則可レ疑。

思うに、重要でなければ嫌うべきで、（根拠が）不確かであれば疑うべきだ。

ニヒツヘバ 既厭且疑、而其書不レ可ニ貴信一矣。

既に嫌ってかつ疑っていれば、その本は貴んで信じること（など）できない。

君子之言、如<sup>ハ</sup>寒暑昼夜、布帛菽粟<sup>ふはくしゅとうぞく</sup>、

無<sup>ク</sup>レ可<sup>キ</sup>疑<sup>フ</sup>、無<sup>シ</sup>レ可<sup>キ</sup>厭<sup>フ</sup>。

君子の言葉は、寒い(日)や暑い(日)、昼や夜(が来ることや)、日常の衣服や食物のように、(ごく当たり前に受け入れられ)(誰も)疑うはずはなく、嫌うはずもない。

天下万世信<sup>シテ</sup>而用<sup>モチマ</sup>レ之<sup>ヲ</sup>、

有<sup>リテ</sup>二<sup>d</sup>丘山之利<sup>一</sup>、無<sup>シ</sup>二毫末之損<sup>一</sup>。

天下の万民は信じてこれ(≡君子の言葉)を利用し、丘や山のように大きな利益が得られ、ほんのわずかも損害は被らない。

以<sup>テ</sup>レ此<sup>ヲ</sup>観<sup>ミ</sup>レバ<sup>コ</sup>今<sup>ノ</sup>作者<sup>ノ</sup>、昭然<sup>トシテ</sup>若<sup>シ</sup>二白黒<sup>一</sup>矣<sup>ノ</sup>。

この点で昔と今の文筆家について考えると、(差は)明らかで、白黒のよう(には)はっきりと異なる(。

著<sup>ス</sup>レ書<sup>キ</sup>不<sup>レ</sup>本<sup>ニ</sup>、諸身<sup>一</sup>、

則<sup>ス</sup>只是<sup>ニ</sup>言<sup>ハ</sup>者<sup>一</sup>耳<sup>ヲ</sup>。

本を書くのにあたって様々(な理論)を自分(の考え)に基づかなければ、その著者はたんに(他人の)言葉を(勝手に借用して)売る者にすぎない。

ろうそうしんかんのと

いへども へんナリト

老莊申韓之徒、學術<sup>e</sup>雖<sup>レ</sup>偏<sup>レ</sup>、

八おのおのよくみづか<sup>ラ</sup>あらはル

要各能自見<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>天下後世<sup>一</sup>。

道家や法家の学徒は、学問は偏重しているとはいえ、

結局はそれぞれ、自分で世の中の後世にも（文章を残し）存在させられている。

このぎや いにしへノ

しハなホよク プ ニ

斯義也、古文章之士猶能及<sup>レ</sup>之。

この意味では、昔の文筆家は今でもこれ（＝現在の学問）に（自分の文章を）残す  
ことができている。

くだリテ シテ よクセすなはチへうぞくセリ

降而不<sup>レ</sup>能乃剽賊<sup>レ</sup>矣。

時代が下って（現在）、それができなくて、なんと（他人の文章を）盗用する（者  
がいる）。

それ シテ テつくルスヲ

ヨ

カツ

ヲ

テフルニ

ニ

夫剽賊以為<sup>レ</sup>文、且不<sup>レ</sup>足<sup>ニ</sup>以<sup>レ</sup>伝<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>、

しかルニいはンヤ

シテ テスヲヤ

ヲ

而況剽賊以著<sup>レ</sup>書邪。

そもそも、盗用して文章を作ったのでさえ、後世に伝えるには（価値が）足りな  
い。それなのに、まして盗用して書いた本ならなおさらそうだ。

しかりしかうシテ

ル

ものつねニム

キヲ

然而<sup>f</sup>有<sup>レ</sup>識者恒病<sup>ニ</sup>書之多<sup>一</sup>也、

あニキヲンヤ

ヨヲ

ニ

豈不<sup>レ</sup>由<sup>レ</sup>此也哉。

そうして、見識がある者は常に、本が多いことを気に病む。  
なんとこれが理由ではないか。